

第1回「森の京都推進会議」結果概要

1 日時：平成26年10月30日（木） 14時～15時45分

2 場所：園部国際交流会館 3階 第1会議室

3 出席者：別添の通り

4 概要

(1) あいさつ（岡西副知事）

- ・ 今回、晴れてこうした場が持てることを嬉しく感じている。
- ・ 先行して「海の京都」事業に取り組んできたが、コンセプトは「森の京都」も同じ。観光振興や林業振興だけでなく、地域創生。どういう地域かを子ども達に伝えていくこと。
- ・ 生産年齢人口が減少する中で、右肩上がりのシステムが変わってきている。これまでのように行政の言うことを聞いているだけでは駄目。税込40兆円のうち、社会保障費に30兆円。文教費や防衛費を入れると、それだけで税金を使い切ってしまう。都会で稼いだお金を地方に分配するのはもう無理であり、自立した地域をつくっていかないといけない。
- ・ JR九州の七つ星や北近畿タンゴ鉄道の車両デザイン等をされた水戸岡鋭治先生が講演でおっしゃった「自分たちがまずまちを知って、まちを好きになって、それをの楽しんだときに初めて、遠くからそれを見ようとする観光客が来る。これは「知・好・楽」といって、非常に大事な話」という言葉が重要なキーワードとなる。
- ・ このエリアを子ども達に受け継いでいける地域にしたい。昔は「都会に出なさい」と言う親が多かったが、今は、インターネット等で田舎にいても何でも手に入る。そういう意味では都会との格差はなくなってきているので、今ある資源を磨き込んでいく時代が来ている。
- ・ 天橋立や伊根、京丹後のコンセプトを資料に記載しているが、何がその地域のアイデンティティなのかを見つけ、コンセプトをつくりあげる作業を「海の京都」ではやってきた。そして、このコンセプトを、回遊システムの整備やプロモーションにもつなげていく。
- ・ そのために、地域の人達と地域外の第一線の専門家とが連携して取り組んでいく。皆様のアイデンティティを専門家達とマッチングさせて発信していく。子ども達に「自分達のまちも捨てたものではない」と思ってもらえるようにしたい。
- ・ 日本中どこでも森なので、自分達の地域の特性は何なのかを御議論いただき、プロの力も借りながら発信していきたい。

(2) 「森の京都構想」（素案）の説明（事務局）

(3) 「森の京都」実現に向けた御提案等

<推進会議メンバー>

- ・ 京都丹波のイメージは「森の恵み」。丹波栗、丹波松茸など、日本一と言われるブランドもある。しかし、先日、テレビ局の取材があった際、「日本一と言ってもいいですよね？」と疑問符で確認された。価格は一番なので品質も日本一ではないかと答えたが、信州や他地域に量では負ける。
- ・ 信州では松茸増産計画をつくって、てこ入れをしており、その結果、豊作になっている。京丹波では何もしていない。栗も日本一と言われているが、愛媛の栗の量にはかなわない。他地域ではそれだけ努力をしているのに、京丹波ではそうした努力がない。
- ・ せっかく伝統や文化が根付いているのに、日本一と言い切れない部分がある。伝統をもっと活かしていかないといけない。
- ・ 保津川の川まちづくりを行っている。保津峡や保津川を綺麗にして、子ども達に伝えていきたいと考え、つつじを植えるなどの活動も行っている。

- ・ 亀岡では、霧を逆手にとって、観光の目玉にすることも考えている。
- ・ 篠では、篠かぶらが名産であり、千枚漬けの材料にもなっている。こうしたものも子ども達に残していきたい。
- ・ 毎日、森の中に入っている。しかし、里山でもツルが生い茂るなどしてなかなか入れない状態。まして奥山になると木が倒れており、入るのは困難な状況。
- ・ 昔は、松茸や花、鳥、蝶を見に、人々が森に入っていたが、今はそんな状況がない。自然と触れあえる施策に取り組んでいきたい。
- ・ 美山は京都市から1時間半。それほど時間がかからずに来ることができる。美山は「1周遅れのトップランナー」とも言われたことがある。コンセプトは、数十年来「日本一の田舎づくり」を目指して、人が少ないのをバネにして地域づくりを進めてきた。
- ・ 構想案の行動原則の中に「集中とネットワーク」戦略の展開とあるが、美山を目指して来てもらえるようにしたい。美山を目指した集中についても検討していきたい。
- ・ かやぶきの里は、よく「日本の農山村の原風景が今なお残る場所」や、「かやぶきの里から未来が見える」と言われる。環境、健康、観光3K+エネルギーの取組を進めているが、その礎となるのが健康的な森。全国に発信できる取組を実施していきたい。
- ・ 美山では、土地も動かず、企業も入ってこない中で、自然を守り通してきた。来年には国定公園の指定がされ、美山は全域がその区域に入ることになる。
- ・ また、美山の自然・資源を守るという中で、念願であったエコツーリズム推進構想が、全国で6番目、近畿では初めての認定を受ける。
- ・ あわせて、この「森の京都」の動きもある。住民全員にこうした動きを認識してほしいと考えており、「森の京都」美山推進会議も設立する。
- ・ 丹波自然運動公園は、府北・中部地域の中核をなす運動公園としてスポーツやレクリエーションを通じて憩いと健康づくり、各種スポーツの競技力の向上の場として年間55万人の利用を頂いており、観光面からも丹波自然運動公園の果たす役割は大きい。
- ・ 丹波PAから公園までのアクセス道の整備により、通過点ではなく、ちょっと降りてみよう、行ってみようという興味を抱かせ、更なる来町者の増加につながるものと思う。丁度、丹波PAが見える公園の南区域には、森の広場という森林ゾーンにアスレチック施設があり現在も多くの利用をいただいているが、経年劣化、老朽化による腐食等で解体部分や撤去箇所もあり完全なものとはいえない。利用者からも要望が高く京都府中部地域の目玉的な「アスレチック」の設置により、確実な誘致がはかれるものとも思う。
- ・ 現在、丹波自然運動公園では、自然豊かな環境を活かし、ジュニアアスリートを中心とした選手育成体制を構築するため、京都府において27年度末完成予定で、トレーニングセンターを併設した府内産木材を使用した300名収容の宿泊所建設の準備が進められている。また、現在、陸上競技場を3種公認の競技場として運営しているが、平成27年度には3種更新になる。引き続き2種公認化に向けて準備を進めていく。
- ・ トレーニングセンターの開設に併せた園内における公認のクロスカントリーコースの整備・設置についても過日、利用団体の陸上競技連盟の方々に下見を頂き、現状のコースの課題、整備の方向性などについて提案を頂き指導を仰ぎながら協議を進めている。森の中を駆け抜ける本格的なクロスカントリーコースは関西圏にはなく、整備をされれば交通の利便性も含め京阪神からも多くの利用もあり、冬季における有効活用が更に高まるのではないかと期待される。有名スポーツアドバイザーなども招致し、京都駅伝チームのトレーニングコースとして利用いただける環境も整えていく予定で調整中。
- ・ 園内9箇所の運動施設においても球技場の人工芝生化、屋根付きオムニテニスコートの整備等々についても、今後の年次計画において要望・取り進めていく方向で進んでいる。
- ・ また、施設整備だけではなく、自然環境の中でのグループ単位で課題解決をおこなうプロジ

ェクトアドベンチャー（PA）の実施についても要望してきた経緯もあり、熱気球の試乗体験も年内に実施の予定で準備しているところ。園内の大木を利用したツリークライミングも好評で多くの子ども達の体験の場となっている。

- ・ 須知高校の学校林、ウイードの森の整備が今後進められる予定だが、公園と高校の歴史を資産ととらえ、有効的な活用を目指していきたいと考えている。ウイードの森については、10/26の京丹波食の祭典において森の公開も園内において、年2回、森のバザールと森の音楽会を開催している。
- ・ レンタサイクルも設置して町内観光にご利用も頂いている。今後においては、丹波PAから丹波自然運動公園へのアクセス道の整備を強く望むところ。
- ・ 地域においては、淀川・由良川水系の分水嶺であることを活かした遊歩道整備も面白いのではないかと。
- ・ 京丹波町内にはICが3カ所できる。丹波PA・味夢の里から直接降りるのは現在は不可能だが、丹波IC、瑞穂IC、わちICで降りると、こういう周遊コースがあるということを実地する場所としたい。
- ・ ウイードの森については、林業大学が授業で伐採して、その木材を使った商品を販売して、木材のまちをアピールできるとよいと思う。
- ・ 町内だけでなく、京北・美山など他のエリアの情報も勉強して、ここでご案内できるようにしたい。
- ・ 来年、京都縦貫自動車道が全線開通すると、通過点になる恐れがあるため、危機感を持って取り組んでいるところ。それぞれの拠点を活用した地域振興に取り組んでいる。その最大級のものが、先週開催した「京丹波食の祭典」。12,400名の来場があった。今後も「食」をキーワードにして誘客を図っていきたい。他にも、写真コンクール、婚活事業なども行い、PRに努めていきたい。
- ・ 拠点の活用も必要であるし、森林そのものの価値の評価についてももう一度共有する必要があると考えている。3つの京都について、「海の京都」「お茶の京都」の大本は「森」。森が荒れると海もお茶も荒れる。森を1つの核とする視点が必要であると考えている。
- ・ 構想についてだが、昭和60年から29年の歳月をかけた「丹波広域基幹林道」が完成したので、その活用が入ると一番よいのではないかと考えている。由良川から広域基幹林道を活かしていけるとよい。畑川ダムや大野ダムも取り入れて活かせるとさらによいのではないかと。
- ・ 大江町で、山村開発の計画をつくったが、バブルが崩壊するなど、経済情勢が変わる中で、計画は止まってしまっている状況。
- ・ 大江は江戸時代、宮津藩・舞鶴藩の2つの藩に分かれており、方言も異なる。意識も違うので、一つにまとまりにくい。また、由良川の洪水対策に意識がいており、森づくりをやっていこうという方向に向かない。
- ・ 大江山では千年の森づくり事業に取り組んでいる。大江山は、蛇紋岩地帯であり、ヒュウガミズキが多く咲く。ヒュウガミズキの名は明智日向守光秀に由来している。
- ・ 鉢山の後を緑でいっぱいにして、ノルディックスポーツ事業、市民にもっと大江山を知ってもらうための勉強会等も計画している。また、京都北部地域・大学連携機構等と連携して、「ちーたび」で、山歩きを実施したところ。
- ・ 最近は雲海で来る人が増えた。まだ活かしきれないものを、もっと活かしていきたい。問題は地元でお金が落ちる仕組みと有害鳥獣対策。この会議でもその仕組みを考えていきたい。
- ・ 亀岡には1万5千haの森林があるが、入るのは森林組合くらい。モデルフォレストでは、村田製作所、東芝等の企業が入ってくれており、京都学園大も参加してくれている。東芝は今年も植林に来られた。家族連れで来られ、普段は森に入れないので、喜んでもらっている。

- ・ 府内産材を使えば補助が工務店に行くが、その仕組みだと、もう一つ消費者が恩恵を感じられていないように思う。地域産の丸太をあげるなどの仕組みの方がよいのではないか。
- ・ 京都縦貫自動車道が全線開通して通過点になってしまう心配もあるが、途中で下りて土産物を買いたい人もいると思うので、一旦下りても料金が通算される仕組みができないか。
- ・ 大江観光に勤めて10年になるが、10年前とはかなり状況が変わっている。今年になって、雲海や吊り橋を見るため、観光バスが4～5台来るようになった。しかし、今はただ、トイレを使うだけでお金が落ちていない。
- ・ 旅行会社に、大江山が商品になるか聞くと、本物なので商品になると言われる。ただ、一流のデザイナーやメディア等と連携して発信していく部分が欠如しているので、私自身がこの会議に出席する中で、そうしたところとも連携していきたい。また、大江や福知山だけでなく、オール京都で競争・連携していきたい。
- ・ 大きな木も小さな木もあるのが森。また、人工林も天然林も含めて森づくりをしないといけない。人工林を森にするためには、間伐が必要。天然林も一定の整備が必要で、光を入れないといけない。そうすることで、森が公益的機能を発揮することができる。大江山周辺の一体的森づくりと京都全体での森づくりが必要である。
- ・ 舞鶴の特徴は「森の京都」と「海の京都」とが出会えること。舞鶴では真牡蠣が好評で牡蠣小屋もオープンしたが、美味しい牡蠣が採れるのは、山から来るミネラル豊富な水があるから。森がないと、資源が枯渇していく。森の資源と海の資源は共存共栄している。
- ・ 大浦半島の自然文化園には、アジサイやツバキが多くあるが、「ツバキと言えばここだね」ともっと言われるようにしないといけない。いいものも、どう相手に伝えるかが重要であり、伝え方によっては、どこにでもあるものになってしまう。
- ・ 農家民泊は受け入れをしてくれるところがない。大きいのはトイレの問題。下水が通っていないところもあるので、子ども達や父兄が嫌がる。「昔の生活はこうだったんだよ」ということを知るよい経験になると思うのだが。
- ・ 地元の人達と何ができるかを話しあって、チームを組んでやっていきたい。
- ・ 大浦半島の多祢山には10kmの遊歩道があり、4つのルートから山頂に登ることができる。年2回、全ルートについて、木の伐採や除草等をしている。遊歩道等もできてから10～15年経つと自然に木が茂ってしまい、もともとは舞鶴湾や冠島まで展望できる場所があったが、見晴らしが悪くなってしまっている。
- ・ 山頂でのイベント、例えば森の勉強会等もやりたいが、山頂にはトイレがないので、女性や子どもは参加しにくい。そのあたりの整備も進めていきたい。
- ・ 舞鶴自然文化園は約44haのエリアからなる市の都市公園で、ツバキ3万本、アジサイ一目5万本等があり、多くの人に訪れてもらっている。青少年育成のため、自然体験活動等も四季を通じて実施している。来月も紅葉の散策会を計画している。
- ・ 大浦半島の背骨に林道が走っており、冠島や、天気の良い日は越前岬も見える。そうしたものも活用していきたい。半島内には、ふるるファームやととの家等もあるので、これらも十分に活用しながら活動をしていきたい。
- ・ 森と海をつなぐ具体的な内容を今後詰めていきたい。
- ・ 愛知県からIターンで綾部に来た。愛知の時は濃尾平野で山が見えなかったもので、山に憧れて、上林に移住した。来たからには、農家民泊等を活用して、都会の子ども達の修学旅行や体験活動等を受け入れたいと考え、ツリークライミング等の取り組みも行っている。
- ・ 人が山に入らないのはメリットがなくなったから。府民の森ひよし、山村都市交流の森と連携して3つの森で取り組みを進めているが、そうした中で感じるのは、森に入る時、ボランティアや環境目的も大切だが、子ども達には何らかのメリットがあった方が入りやすいのではない

いかということ。そのメリットについて現在考えているところ。

- ・ 山の状態は最悪で、林道も荒れ放題。京北は松茸も有名だったが、松枯れで松が駄目になり、檜の木も檜枯れで駄目な状況。有害鳥獣被害がひどく、山里は檻の中で野菜をつくらないといけないような状況にある。
- ・ 北山杉をつくっているが、後継者が不足しており、最盛期の1/3程度。山の魅力が薄れており、新しい山の魅力を発信していかないといけない。バイオマス発電も京都市の協力も得て進めている。
- ・ 山や木で食べていけるような後継者をつくらないといけない。北山杉の枝打ちのできる人を育てたいということでそうしたことにも取り組んでいる。北山杉は山の盆栽。ずっと手が入り続けるとああいう杉は育たない。北山杉自体は650年くらいの歴史しかないが、御用林として京北は千年以上の歴史がある。
- ・ 京北は93%が森林。大阪市の面積とほぼ同じ。雨は日吉ダムから保津川・淀川へと流れるので、この地域の山が荒れると、下流域で災害が起きる。この地域の山をどう守るかを考えていくことが重要。
- ・ 自然を敬うという日本人の価値感をもう一度見直す必要がある。京北の伏条台杉を見ると圧倒的な自然のパワーが伝わってくる。今後の京北の森づくりについては、森の持つ効用を活かすことも含めた取り組みを提唱していきたい。
- ・ 京北は平安京造営に深く関わった。今も当時切り出された切り株が御所御料地であった片波の山に多く残っており、どのように切り出されたのかその工夫や苦勞が忍ばれる。
- ・ 時代祭の先頭は京北山国隊。明治維新の際、他に先駆け自費で官軍に参加するほど勤皇の志が高く、誇りも高い土地柄である。
- ・ 木材の、そして自然再生可能エネルギーの供給地として、京都の森を復活させたい。CLTによる大型建築物（10階程度）は既にヨーロッパ（スイス・オーストリア・イギリス等）で始まっている。アジアの新興国も本物の木造建築で家を建てたいという富裕層が増え、九州の志布志には供給が追いつかないほどの注文が来ているとのこと（13年104,107 m³を輸出）。一方国内でも宮城栗駒総合支所（接合金物工法木造建築）が東日本大震災で倒壊せず、災害対策の拠点となったことで、改めて木造建築の良さが分かり、東北地方や静岡でも大型木造建築物が増えている。
- ・ 京都はどこよりも大型木造建築物が古くから多くあり、その良さも充分に知り、伝統工法も伝承されている。これらの新しい動きに対し、京都が応えなくて、京都の誇りはどうなるのか。伝統工法に加え新技術のCLT、プレカットを取り入れ、その製材された建材を舞鶴港から輸出する。製材時に出たチップをバイオマス発電のエネルギー源に利用する。夢のような話だが、実現可能な自然の理にかなった施策だと考えている。
- ・ あわせて小水力発電の普及にも取り組みたい。
- ・ 京阪バスは京都市内で90年間定期観光バスを運行している。9月には新車を3台つくった。ラッピングバスが好評。
- ・ 90年という歴史があるが、これまでは残念ながら京都市内の観光にほぼ携わってきた。しかし、ニーズが多様化する中で、もっと広域から来てもらうためにもメニューの多様化に取り組みたいと考えている。今年から県境を越えて滋賀県にも行っている。多くの人に乘ってもらっており、しかも6割が関東から。9月、10月には亀岡の出雲大神宮、大石酒造等に行くバスも運行した。このバスも初めてのわりには上出来であった。今年の冬には、京丹波の冬ほたるを案内するツアーも企画している。
- ・ そういう目で見ると、それぞれの地域にはすばらしい観光資源があり、もっと紹介すれば、関東からもインバウンドも来るのではないかと思う。例えば、福知山。福知山城もいいが、治水記念館は由良川の歴史がよく分かる資料館で非常に面白い。こうしたところももっと紹介すれば興味を持ってもらえるはず。地元の人が当たり前と思っているものでも、外から見ればす

ばらしいものがある。京都縦貫自動車道も開通するので、天橋立くらいまで行ける。その中で、丹波地域のツアーももっと考えていきたい。

- ・ 特にすばらしいと思ったのは芦生の原生林。ここは「森」ということだけで売れる。日本中どこも森だという話もあったが、芦生の森は違う。
- ・ 出石の永楽館では、年1回、片岡愛之助を呼んで歌舞伎をしており、それで出石も有名になった。もっと紹介していけば観光資源になるものは本当に多いと感じている。
- ・ 本日の会議で出てこなかった言葉で、私が好きな言葉が「ワクワク」。「ワクワク」をつくっていかないといけない。出石の芝居小屋もワクワクする。地元の人も見に来る人も喜んでワクワクすることが、森の京都の行動原則にある「デザイン重視」にもつながる。
- ・ 宮津、伊根、福知山、美山等に900~1000人の学生を連れて行っている。宮津高校ではソーシャルデザインの考え方について教えており、阿蘇海の浄化に取り組もうとしている。ソーシャルデザインは人々をその気にさせるデザイン。カレーライスを残さず綺麗に食べられる牛乳パックで作ったヘラのデザインをしたが、700人の学生にその使用を働きかければ、その親や祖父母等にも広がり、環境浄化につながる。
- ・ 舞鶴について、赤れんが=舞鶴にはしたくない。舞鶴には、平家の落人が暮らしていた集落等もあり、川も海もあって日本の原風景に近いところ。コアの情報発信拠点としての赤れんがと、小さな光を当てるところとをネットワーク化して、地域まるごとミュージアムづくりをワクワクしながら進めたい。型にはまらず、ワクワクまちづくりを進めたい。

<今西南丹広域振興局長>

- ・ 地元では当たり前でも外から見ればすばらしいものがある。台湾にプロモーションに行った時にも雪や霧など地元ではマイナスに思われているものが評価された。
- ・ 舞鶴には林ベニヤ、綾部には木材加工センター、京丹波には林業大学校、亀岡には集成材の工場が2つ、京北には木材センターがあるなど、このエリアはまさに「森の京都」のすべてを物語っている。すばらしい「森の京都」ができる。
- ・ 京都府は京野菜には力を入れてきたが、特産林産物の振興ももっと頑張らないといけない。本日、農林水産部の担当者も来ているので、相談していきたい。
- ・ スポーツ観光についても、東京オリンピック・パラリンピック、関西ワールドマスターズゲームズ等も今後開催されるので、国際大会も視野に入れて考えていきたい。

<岡西副知事>

- ・ よい資源があることを再認識した。ただ、どうまわって、どこでトイレに行って、食事をして、泊まるかということまで考えないといけない。竹田城はグーグルが発信して多くの観光客が来たが、そうしたところまで考えられていなかったのでお金が落ちていない。
- ・ 京北の台杉等はストーリーはできており、バスで連れて来ることできるが、今のことだけでなく次の世代のことまで考えないといけない。亀岡は随分お金は落ちているが、それをどう広げるか。林道はすばらしいが、中にレストランやホテルをつくるなどお金が落ちる仕組みをつくるのかつづらないのか。そうした長期的な視点で考えてほしい。
- ・ 行政は慌てて発信しようとするが、そうするとまちを破壊しかねない。このため、「海の京都」では2年間、露出は抑えてきた。ただし、ダラダラやっても駄目なので、2年間、その次、また2年間という形でやっていく。

<推進会議メンバー>

- ・ そうした観点では、伊根や雲原でよいニュースがある。伊根では鍵屋さんが1組民宿をしていたが、同じように1組民宿にチャレンジしようとする若い人達が2~3組出てきた。雲原では1人の猟師が160頭の鹿をとって頑張ってきたが、若いカップル2組が猟銃の免許をとって手伝おうとしている。そうしたことも集約していろいろな地域で伝えていけば、ソーシャルデザインになる。

<本田企画理事>

- ・ 宝の山だと思いながら聞かせていただいた。今日いただいた御意見以外にもたくさんの御意見があると思うので、メール、文書、電話等で寄せていただきたい。行政の頑張りはしれているので、皆様と一緒に取り組んでいきたい。